

Servas Japan Tohoku



支部ニュース

No. 94



1	今年（支部総会報告も含めて）のこと	支部長 T.N	1
2	受け入れ報告		
	M.S（宮城）		2
	T.S（岩手）		3
	N.T（福島）		5
	T.S（新潟）		6
	C.M,C.N（福島）		10
3	編集後記		13

TOHOKU

1 今年（支部総会報告も含めて）のこと 2018.11.30 支部長 T.N

みなさん！！多忙な一年もう終わろうとしています。みなさんお元気ですか？やり残していることはないですか？私はこれから10年で自分の『終活』をしようと思う一年でした。できるかどうかわかりません。

1. まず、ISO審査員(品質・環境)だけでなくGAPの審査員(農業)への歩みを始めました。年末には労働安全衛生関係審査員に挑戦します。第二の人生の仕事の集大成を10年かけてしたいです。

2. 次に、東北大学法学部の新潟県支部長を仰せつかりました。約200名の卒業生がいるとのこと。大学と同窓生のためになることをしたいと思います。

3. さらに、来年1月から我が家の別棟(ホワイトハウス)に新婚さんが住むことになり、家具付きでお貸しします。断捨離ではないですが、整理をしています。

4. 11月23日下町ロケットのロケが近くで行われ、キャストの前をヨネックスの帽子をかぶり、歩きました。雨模様でした。役者も楽でない？と感じました。

5. ホームステイは台湾のC.L.Yさん姉妹、東海支部のK夫妻をお引き受けしました。海

外旅行はインド、チェコ、ポーランドに行きました。

さて、本年は支部総会を米沢で開催しました。出席者 11 名（委任状 6 名を含む）でした。年次会計報告と決算などの報告に続き、SOLのデモを T さんからお願いしました。なお来年は秋田の K さんのお店を予定しています。定休日の水曜日にお店をお借りして実施します。麵処竜馬 <https://r.gnavi.co.jp/1wf1he180000/>

2 受け入れ報告

報告者 M.S (宮城)



2018 年 10 月 7 日～9 日 ドイツ人・Ms. C.G 51 歳 女性 教師

今年の 10 月 13 日から 20 日まで、韓国・ソウルでサーバス国際会議が開催されました。私がモントリオールの国際会議に初参加したのが 40 歳の時で、30 年以上が経ちますが今でも鮮明にその時の事を覚えています。日本でもいつか国際会議を開きたいと私自身も思っていましたし、年一回の開かれる国内会議でも何度か雑談の中で話しをしたことがありました。しかしながらそのために費やされる膨大な準備活動を前にして実現は難しいと分かり、議題には取り上げられることはありませんでした。

今回のソウルで国際会議が開催されるにあたって韓国会員がどれほどの準備をしたかを想像して、心から敬服しています。韓国の友人から、会員が少しずつ増えているとも聞いています。日本からの参加者 5 名も韓国サーバスから大歓迎を受けたことでしょう。

ソウル国際会議を前に、我が家にサーバス・ドイツの会長 C を受け入れられたことはとても幸運なことでした。彼女はドイツの会長を 5 年間務めていて、今回の韓国サーバスの国際会議の開催にあたり尽力を惜しまなかったことを知りました。

ドイツ会長として、彼女はヨーロッパ各地でもサーバス活動に積極に関わってきている活動的な女性です。私の家にある「トラベラーの思い出ノート」を見ては「この人を知っている!」「この人も知っている!!」と大喜びしてくれました。私たちがもしサーバス会員でなかったらこんな素晴らしい感動的な出会いはなかったのだから本当に嬉しいことです。

受け入れに当たって心配したことは、仙台駅付近が次々と開発されていて 40 年間も住んでいる私でも道に迷うことがあるほどだということです。ましてや、ドイツ語と英語は話せるが日本語はダメだという C に、メールを通してその旨を伝えると、「ドイツの北部・ハンブルグに住んでいるので、人ごみに慣れているか



ら心配しないで」と返信をもらったのでした。10月7日の夕刻、地下鉄の駅で待っていると若い日本人女性と楽しそうに話しながらCが躊躇なく私の車に近づいてきたのです。日本人女性の助けもあって全然困らなかったそうです。その若い女性はスウェーデンから帰国したばかりで、道に迷っている外国人がいたら「恩返しをしたい」と思っていたと話してくれました。日本の女性たちも積極的に海外に出て行っていることを改めて実感しました。

次の日、Cが選んだ観光地は「松島」でした。松島について事前に調べていて多いに楽しんだ様子で安心しました。ここでも彼女の「日本大好き!」のオーラが日本人に親しみを与えるのでしょうか、松島から何と車で送られてきたのです。松島で道を訊いたその女性は実家に帰るところで、偶然にも彼女の実家が私の家の近くだったのです。

トラベラーたちは一日を目一杯過ごすので疲労困憊しているはずですが、何と素晴らしいハプニングが起きたことでしょうか。この体験が彼女にとって更に日本が魅力的な国となったのに違いありません。日本語を勉強してまた必ず日本に来るからと約束して元気に帰っていきました。

報告者 T.S (岩手)

E.B ハンガリー出身 18歳 女性

2018年8月9日(木)~11日(土)



一関に来てここ数年、春の来訪が多かったのが、今年は連絡がなく寂しく思っていた頃、Eさんからステイ希望の連絡を受けた。Eさんはハンガリー出身で、AFSでの高校留学で静岡に1年間ホームステイした後、現在は大阪で大学入学準備をしながら語学研修中だった。

8月半ばに北海道からの帰り道で岩手に寄りたいというので、ちょうど在宅予定期間の2日間、ステイを受け入れることにした。日本のアニメ好きのEさんは日本語が驚くほど



上手で、まるで外国人を受け入れている気がしなかった。大人しいタイプではあるが、自分の考えをしっかりと持って意思表示ができる、高校生というよりむしろ大学生のイメージを受けるほどの落ち着きぶりだった。当日間際になり、同時期に北海道を直撃していた台風で移動予定日のフェリーがキャンセルとなり、突然の予定変更で新幹線乗り継ぎ、なんとか到着した。



事前調査からハイキングと歴史が好きだということで、1日目は山の日ということもあり、低めだが北上夏油スキー場での山頂散歩。行き帰りは無理せずゴンドラを使って、その後、麓でのバーベキュー。天気はもってこいの快晴で、やや風はあったものの夏の野外ランチは格別に美味しかった。レストハウスでちょうど東北手作りクラフトフェスティバルが開催されており、娘たちがとんぼ玉やハーバリウムなどの

クラフトに勤しむ中、Eさん自身は様々なクラフトに興味深げに目を馳せていた。帰り道は、今や世界のカーニバル競技会場としても使用される胆沢ダムを眺め、自宅近くの巖美溪に立ち寄り景色を楽しんで帰宅した。天気8割と言われる旅事情だが、北海道の台風とは打って変わって理想的な快晴の綺麗な夏の一日に様々な自然の景色を楽しむことができ、とても嬉しそうだった。

帰宅後は夕食に我が家では定番の手巻き寿司。あまりしたことがないと言って喜んでくれた。また娘たちもハンガリー語を教えてもらったり、ガイドブックを見てヨーロッパでもその美しさを誇る首都ブタペストの写真を見て名産品を教えてもらったり、英語のバリアがないため、みんなで自由に会話を楽しんだ。

翌日はお待たかねの中尊寺、金色堂。私たちは午後から予定が入っていたため同行できなかったが、夏休み中の週末ということで朝から観光客で賑わっている中尊寺の登り口まで案内し、帰りの仙台行きの電車を確認して別れた。中尊寺広域は世界遺産に指定されているが、結構広さもあり立ち寄るスポットも多いため、大人数で行くと思うように回れないことから、1人散策を勧めている。一日旅の思い出整理、また異国地の雰囲気を楽しんでもらえていたらと思う。

今年唯一の受け入れとなったEさん。都会に憧れる子供達とはうらはらに、岩手の自然の豊かさを堪能し、また来たいと言ってくれた。若者にとっても、いつも掘り所になるのは自然の美しさなのだろうか。何もなさそうな景色を眺めて心から満喫している様子を見ると、地元を案内する度こちらが改めて地元の良さを再認識する機会が与えられるようで気持ちが温くなる。今後の計画として、日本の大学に入学後、そのまま日本企業に就職したいとのこと、ハンガリーの生活水準や景気、国力を客観的に見ながら、彼女だけじゃなく若者全体の世界観、国家観を教えてくれた。



今年、ステイの依頼連絡があったのは4件。そのうちイタリア、ベルギー、オーストラリアからの来訪者は日程の都合が合わず受け入れられなかった。せっかくの機会なのに…と思うと、実際受け入れが叶って出会うに至るというのも相当の縁だという思いを、またしみじみ感じる。さて、来年はどんな出会いがあるのか、楽しみ、楽しみ……。



報告者 N.T(福島)

(1) **Mr. R.B** と息子の **Mr. E.B** USA 男性 62歳、23歳
8月20日 1泊2日

あずま温泉に行きいっしょに楽しむ。オリンピックの聖火リレースタート地点、並びに野球の会場をおしえる。帰りに次のメッセージを頂いた。

We have loved being your Guests and
Seeing Japan through your eyes.
Thank you for your Generosity.
R and E



(2) **Mr. B.S** オーストラリア 男性 56歳 Environmental Educator

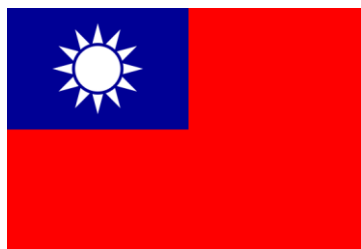
原発事故ならびに震災後の福島について知りたいとのことなので飯舘村を案内した。閉鎖されている学校を見て少々驚いた様子でした。一方、村の中心施設の見学やオリンピック時にはラオス国のホストを引き受けることなどを聞いて積極的な村民の態度を評価していました。



報告者 T.S(新潟)

(1) C.L.Y 台湾 (女性) 48 歳

8 月 4 日～5 日



20 年以上前になるとおもうが韓国の団体のサーバスの方々と福島で交流会があったが、サーバス歴 40 年以上の一ホストとして初めてのアジアからのトラベラーを我が家に受け入れた。アジアからは少なからずのトラベラーが日本に来ているだろうが、新潟では初めてである。8 月 4 日、家の近くの駅に迎えに行った。3 人の女性が待っていた。確か 2 人と言っていたはずであるが、どういうことなのかと思った。話しているうちに事情がわかった。3 人目の女性は香港の方で、新潟駅でたまたま会い、彼女たちがサーバスのことを話し、私の所へ一緒に行かないかと誘ったらしい。台湾のお姉さんは英語はよくできなかったが、妹さんはまあまあ話した。香港の女性は英語には不自由しなかった。家で少し休んでから、私がよく行く回転寿司店で夕食を食べることにした。寿司店に行く途中私が数年前から聞いている台湾歌手の CD をかけたら、姉妹は上機嫌であった。土曜日だったので、客は多かった。受付は AI のロボットのようなものだった。香港の女性は物珍しいのか盛んにスマホで写真を撮っている。最後は皆で交互にロボットとのツーショット。子供のようにはしゃいでいる姿が何とも言えない。日本なのに自分の国にいるようにリラックスしている。その光景は実に平和な光景だった。回転寿司店では家内も一緒だったが、よく食べた。2 年前台北で寿司を食べたがまあまあの味だった。ロンドンでも食べたが、寿司もどきの寿司で、1 個 400 円位した。それに比べると日本の寿司はやはり美味しくて安い。一皿 100 円、平日は 90 円だと言ったらびっくりした様子。特にお姉さんはうまそうに食べ、いくらでも食べる。私が注文するから食べないと失礼かと思って食べたのよ、と言っていた。家内も私も久しぶりの寿司だったので、美味しく食べた。食事後香港の女性を家の近くの駅まで送った。彼女は市内のホテル泊だそうだ。

家に帰っていろいろ話した。お姉さんの方は 48 歳だが、若々しい。若い時軍関係の仕事をしていた。子供は一人で中学生。姉妹のようだねと言ったらニコッと笑い、喜んでいて。旅行が好きで、これまでイタリア、ドイツ、タイ、シンガポール、インドネシアを訪れている。妹さんは 30 代、中学校の先生。英語を理解でき、日本語も少し話せた。何かの拍子に「ももたろうさん、ももたろうさん」を歌い出したのにはびっくり。なぜこんな歌を知っているのだろうか。今回の姉妹の新潟に来た目的は「大地の芸術祭」というイベントを見ることだった。「大地の芸術祭」は新潟市での開催ではなく、新潟からは遠く離れた十日町とか津南等で開催されている芸術祭である。田んぼやトンネル等自然を利用して芸術作品の展示がある。今年は 7 月 29 日 (日) から 9 月 17 日 (月) までの 51 日間の開催である。ちなみに 2015 年の大地の芸術祭入場者数は 51 万人を超えている。以下はネットの紹介文である。

3年おきに開かれる『大地の芸術祭 越後妻有アートトリレ』が行われるのは新潟県十日町市と津南町のおよそ760万平方kmのエリア。芸術祭が行われるたびに新しい作品が制作されるほか、それまでに作られた作品のうち一部が残され、どんどん作品が増えていく。今回、新しく生まれた作品はおよそ180点。前回までの芸術祭で作られた作品は200点を超える。『大地の芸術祭』ではもちろんアートが主役だけれど、楽しみはアートだけではない。建築、食、自然、いろんなものを一緒に味わえるのだ。

作品はネットで見られるが、右はその作品の一部である。



作品展示場は広いのでシャトルバスで移動である。一日券は確か10,000円と言っていた。私はまだ行ったことがないが今年度は4,50万人を超える入場者であろうか。東南アジアからは来場者が多く、特に中国、台湾からは多いと言っていた。日本への外国人は東京や京都、奈良といった観光地巡りが圧倒的であるが、最近はこのような地方で開催の芸術祭にも結構観光客が訪れている。“travel for specific purpose”（特定の目的を持った旅）である。台湾の姉妹は日本へは何度か来ており、有名な観光地巡りはすでに終えており、去年は富士山に登っている。今回は新潟での大地の芸術祭と長岡の花火大会のためにわざわざ新潟まで来たのである。リピーターならではの旅行である。2年前、私は台湾に行ったことがあるが、概して台湾の人たちは親日で、フレンドリーで、新潟のことを知っている人たちもいた。新潟は雪と米と酒ですね、がお決まりの新潟のイメージであった。今回我が家を訪れた姉妹もとてもフレンドリーであった。初めて会うのにもうずっと前から知っているような親しみやすさがあった。お姉さんの方はスマホの操作がうまく、さっさとLINEを立ち上げてくれた。我が家から弥彦のTさん宅へ向かった。新幹線で行き、途中で在来線に乗り換えて弥彦に行こうとしたが、ローカル線のほうが田園風景を見られるというので、ローカル線を利用して弥彦に向かった。その間もLINEを使い、メールを送ってくれた。台湾に帰ってからもLINEは使えて、すぐメールが来た。その後もLINEで近況を報告している。台湾にはいつ来るの、と聞かれたが来年春あたりにできれば訪問したいと思っている。今年の夏は猛暑であったが、彼女たちが来たときはそれほど暑くはなかった。もう数日遅ければ新潟祭りや花火大会を見ることができたが、それがちょっと残念だった。

(2) N.H フランス (女性) 47歳 8月9日～11日

台湾からの旅行者を迎えてから1週間後、フランスから母親と息子が我が家に来た。8月7日に関空に着き、大阪で1泊し、9日に我が家に来た。彼女たちの旅行も通り一遍の観光旅行ではない。私がまだ行ったこともない所に行くことを計画していた。

彼女の子供は色があさ黒く、黒人の血が混じっていた。詳しくは聞かなかったが、父親はアフリカの方で、今はビザの関係上スウェーデン(?)に住んでおり、フランスには入国できないようだ。彼女は法律関係の仕事をしており(LOIにはJuristと書いてあった)、アメリカやスウェーデンでも勉強しており、フランス人にしては結構英語がうまかった。住まいはドイツで、仕事はフランスである。毎朝ローラースケートのようなものでフランスに行くそうである。国境沿いに住んでいるので、陸続きのヨーロッパならではの。息子さんは12歳で、9月からは日本で言う中学生である。母親とドイツに住んでおり、ドイツの学校に行っている。いずれはドイツ語にも不自由を感じなくなるであろう。無口で英語が話せず、残念ながら彼と話すことはできなかった。マンガ、ポケモン、サムライ、すし、みそ汁等、彼は大の日本通である。スマホで見せてもらったが、太巻きやどんぶりものやら結構日本食を自分で作っている。台湾の姉妹と同様回り寿司店へ行ったが、彼は興味津々である。スマホで寿司を撮ったり、若いだけに随分食べた。一皿100円だよ、と言ったら彼はビックリしていた。2日目の夕方にはラーメンを食べに行ったが、彼はしきりにラーメンを写真に撮っていた。



翌日、息子の方は時差ボケのせいやお昼になっても起きてこない。彼女が起こしに行っ、ようやく下に降りてきた。起きたばかりで食欲もなく、ただコーヒーを飲むだけ。今日はどうする?と聞いたら我が家は海に近いので、泳ぎに行きたいと言う。それで彼女と彼を車で数分の海水浴場へ連れて行った。当日は新潟も暑く、32度位の気温であった。金曜日だったので、海水浴客はそれほど多くはなかった。フランスだったら平日でも海水浴客で一杯になる、と彼女は言っていた。面白いことに(!)フランスでは女性は上半身には何もつけないという(これは海だけではなく公園などでも同じだという)。

今回Nさん(Nはフランス語でクリスマス。彼女は12月28日生まれ)は夏休みを利用しての日本旅行である。6週間の日本滞在である。フランスでは夏休み4週間あり、もし全

部使わなければ使わない日数分には手当が支給されるという。日本であれば普通のサラリーマンの夏休みは 1 週間も取ればいいところであろうが、バカンス天国フランスは違う。フランス人はお金のためには働かない、バカンスのために働くとも言っていた。生活の質の違いにはいつものことながら驚かされる。N さんは我が家の後は山形の出羽三山へ行った。その後は M さん宅へ行くと言っていた。フランスに来たら必ず連絡してねとの彼女の言葉であった。

(3) R.S オーストラリア (男性) 66 才 11 月 17 日～19 日

10 月にメールをもらったとき、メールには「私はホロコースト生き残りのユダヤ系ポーランド人の息子です」と書いてあった。私は内心ドキッとした。聞きたいことが多くあったのですぐ受け入れの返事を出した。我が家には N さん (福島) 宅から来た。朝 N さんの家を出、夕方の新潟での待ち合わせまで時間があるので日光に行ってきたと言っていた。17 日はたまたま家内のいところが来ており、4 人で寿司を食べに行った。R さんは何度も日本に来ており、寿司は好物ということであった。回転寿司にしてはコメも魚も美味しく、特にその日は大トロ祭で、皆で大トロづくしであった。今回 R さんは 2 週間の旅行で、日本に来る前にイスラエルを旅行してきている。あちこちに友人や親族がいる。イスラエルは私も行きたいが、ちょっと危険ですよ、と言ったら国内はそんなに危険ではない、ただガザ地区だけは特別で、旅行者は行けないと言っていた。R さんは 66 歳で、病院で手術する医師にデータを準備する仕事をしている。週 3 日働いている。R さんは奥さんとは別れ、息子さんが二人いる。お兄さんが東京に日本人のガールフレンドと住んでいる。今回は息子に会いに来たと言っていた。息子さんは定職はないが、モデルをしている。

R さんの言う「ホロコースト生き残りの息子」について彼から聞いた話を書いてみたい。R さんはユダヤ系ポーランド人であり、戦争中はよく知られているようにナチスドイツからは大量虐殺された民族である。お母さんはユダヤ人であり、当然ホロコーストの対象であった。しかし、彼女はユダヤ人ではないポーランド人の身分証明書をもらい、その写真を貼り替えたのである。当時は印刷技術とか今ほど高度ではなかったもので、写真を貼り替えてもばれることはなかったのであろう。母親は別のポーランド人になりましたのである。でも R さんによれば周囲に人はお母さんの正体をうすうす知っている人はいたそうである。そのような人がナチスに密告でもしたら『アンネの日記』のアンネ・フランクのように即座にナチスにつかまっていたであろう。母親以外にも同じように他人の身分証明書を使い、生き延びたユダヤ人がいたそうで、中には偽の身分証明書の名前で一生を過ごした人もいたそうである。ユダヤ人でないポーランド人として生き延びた母親は、しかし、ドイツ人家族のもとで酷使され、寝場所は家畜小屋だったそうである。戦後母親はオーストラリアに来たが、ドイツ人の家庭での労働のため今でもなにがしかの補償金をドイツ政府からもらっている。母親は現在 96 才で、メルボルンの施設で元気に暮らしている。まるで映画の

ストーリーのような生涯である。彼女にポーランド人の身分証明書を譲ってくれたポーランド人はどのような思いで身分証明書を譲ったのであろうか。自ら危険を犯してまでもユダヤ人を助けてあげたそのポーランド人には敬意を払わずにはいられない。Rさんにはもう一人ホロコーストを生き延びた親族がいる。その方は R さんのおじさんで、彼もユダヤ人である。助かったのは彼が“tailor”であったからである。おじさんは収容所にいたが、仕立屋さんで、ナチス軍の軍服を作らされ、生き延びたのである。仕立屋さんでなかったら彼も生き延びることはできなかつたであろう。母親といい、おじさんといい、運命は二人には微笑みかけてくれたが、400万とも500万とも言われるユダヤ人のホロコーストを考えると、悲惨な戦争には言葉がない。

2日目、彼を新潟で一番高いビル（朱鷺メッセ）へ連れて行った。眼下には新潟の町並みが見える。この日は天候も良く、展望台は人で一杯だった。遠くに佐渡が見え、今はまだ穏やかな日本海を見ながら、平和のありがたみを感じざるを得なかつた。この後、護国神社に行った。そこでは結婚式を挙げたばかりの若いカップルが親族、友人に囲まれ、写真を撮っていた。Rさんも盛んに写真を撮っていた。七五三で神社に来ている子供たちも見られた。女の子は3歳であろうか、Rさんがカメラを向けると、母親の後ろに隠れて、着飾った姿を見せてはくれなかつた。平和な、平和すぎる日本である。

Rさんは翌日朝早く長野の中山道の宿に向かって我が家を離れた。その宿は外国人に人気があり、昔風の民家を宿にしているところである。その後は瀬戸内海の小島（聞いたこともない）に行き、京都で4、5日過ごし、関空からオーストラリアに戻るということであつた。Rさんは物腰が柔らかく、丁寧な英語を話し、ホロコーストを生き延びたユダヤ人であるお母さんの苦勞を知ってか、いろいろな面で共感できる人であつた。このような人に会うとサーバスを通してのトラベラーとの出会いはやめられない。

報告者 C.M.C.N(福島)

(1) Mr. B.S オーストラリア人 56歳 男性 2018年 8月 31日～9月 1日

5月末に第一子を授かり、しばらく実家の山形県東根市で生活していました。その時期地元ではさくらんぼの最盛期。出産とちょうど同じ頃からスタートし、様々な色や大きさや味の品種が出回ります。私の親戚もさくらんぼ農家なので出荷できなかつたさくらんぼをたくさんもらいます。私が実家にいる頃に訪ね



てきた旦那はこんなにたくさんの種類のさくらんぼは人生で初めて食べた喜んでいました。

そんな風に地元生活を満喫しているさなか、Bさんから連絡をもらいました。彼は福島のNさんのお宅に泊まった後、北海道に向かってからまた福島市に帰ってくるとのことでした。

2017年以來サーバスの受け入れはなかったのでは是非受け入れたいという気持ちでいっぱいでした。しかし彼が福島の我が家を訪ねたいと言った日程は、私がおよそ4ヶ月間の実家暮らしから福島市に生活の基盤を戻して一週間後にあたります。3カ月になる赤ちゃんを世話しながら福島での新生活を始めたばかりの私に受け入れができるだろうかとしばらく考え込んでしまいました。でもその不安に好奇心が打ち勝ち受け入れる決意をしました。

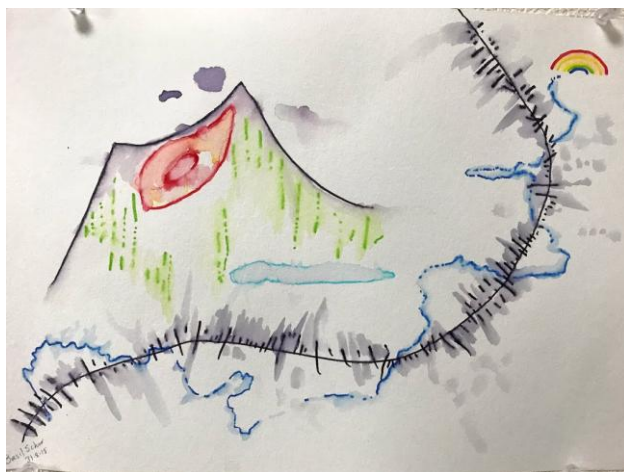
さて、福島駅にBさんを迎えに行ったのは夕方。この日は山形名物の芋煮を一緒に作ろうとしていたので、これからどこかに遠出するには時間がなくどのように過ごそうかと考えていました。ひとまず、家の周辺に何があるのか案内しようと福島市の中心の石畳の商店街を歩いていると、私の友人に会いました。そこで和菓子をいただきさっそく日本文化に触れることができました。するとその友人は稲荷神社にお参りに行こうとしていたというのです。実は私もそこにBさんを連れて行こうとしていたので一緒に行くことにしました。鳥居のくぐり方、手水の使い方、お参りの仕方などを丁寧に説明するとその通りにやってくれました。そのあとは蕎麦屋さんのそば打ち道具を観察したり、せんべいやさんをのぞいたりしました。また、普段は甘いものはあまりたべないとのことでしたが、日本の物はなんでも試してみたいと言って駅前のドーナツ屋さんでドーナツを買い食べたのも印象的です。

後になってこの街歩きの時間がとても楽しかったと言ってもらえて少し驚きました。私からしたら、どこか観光地に連れて行ってあげられたわけでもなく、なんともない場所と一緒に歩いただけなのだけれど、それが面白かったといわれてはっしました。もし私がサーバスで旅行したとしたら、何気ない地元の散策を彼と同じように心から楽しむはずですが、でも、ホストをしているとどこか頑張らなければならないと思うところがありました。だから受け入れを悩んでしまったのかなと思い返しました。自然体でいいのだと思わせてくれたBさんの一言でした。

彼と一緒に料理をしていて勉強になったことがあります。彼は環境保全活動をしており、オーストラリアの仲間と所有している畑で、地域住民や子どもたちと畑仕事をしています。そういう生活をしている人からすると、地球にやさしくする態度が自然と身についているのでしょう。私がおぼろの皮をむこうとしたら「皮の近くは栄養がたくさんあるからむかなくてもいいですよ」と言ったり、「日本人はネットに生ごみをいれるのに、捨てる時はビニール袋に入れてしまうのはへんだ（土に返らないから）」と言ったりして、私の「当たり前」が「当たり前ではない」のだと気付かせてくれました。

また、彼はアーティスティックな側面も持っており、笛を娘の前で吹いてくれたり、北海道の電車の窓から見えた風景画をプレゼントしてくれたりしました。私はお礼にマレーシアのボルネオ島の楽器「サペ」を演奏しました。

一泊しかしていないとは感じられない、シンプルだけれども味わい深い時間を過ごすことができました。



(2) Mr. R.W 62歳 男性、Ms. C.W 62歳 女性 アメリカ人夫婦

2018年 10月 16日～10月 17日

彼らは福島市に友人がいて、私たちの家に泊まる前もその友人に福島市を案内してもらったようです。福島駅に迎えに行くと、ちょうどその日本人のご友人が二人を送り届けたところで、その方に直接お会いすることはできませんでした。福島のどんな人につながっているのか気になっていたのでご挨拶できなくて残念でした。彼らにはうちの娘より数か月だけ大きい孫がいるそうで、娘と共に迎えるととてもかわいがってくれました。

福島駅から自宅のほうに歩きながら街を説明していると、「数日前にもここを通った、あの辺のホテルに泊まったのだ」と教えてくれました。同じ地域にしばらく滞在していると土地勘がついてきてなんとなく自分の居場所であるという感覚が生まれることがあります。これは旅をしていて嬉しいことの一つだと思います。

先日オーストラリア人の B さんを連れていった場所に行ってみると、国際協力に尽力している友人に出会いました。その内装が素敵で撮ったのがこの写真です。R さんは、いろいろめぐった中でこの場所が一番気に入ったと言っていました。

そのあと街歩きをしていると、そこらじゅうにお寺があるのを見つけました。R さんは「これは家なの？」と聞いてきました。私は



びっくりして「冗談を言っているの？」と聞き返してしまうほどでした。なるほど、日本人にはお寺と家の区別はつきますが、あまり馴染みがないと、お金持ちの豪邸に見えるのかもしれませんが。そういう何気ない一言から文化の違いを感じました。

文化の違いで一番印象に残ったのは、なぜお風呂ではなくシャワーを浴びるのか、でした。乾燥するカリフォルニアに住んでいる彼らにとって、水はとても貴重なもの。浴槽にお湯を張ってお風呂に入るなんて贅沢なことだ、というのが彼らの考え方のようです。受け入れから数カ月経ってのことですが、日本でも水についてニュースで大きく取り上げられるようになりました。例えば、水道管理を企業に任せる必要が出てきていて水道料金が上がる可能性がある、だとか、水道管に対する水源の近さや人口密度によって現在も水道料金が大きく異なる、だとかいうことです。質の良い水がただで手に入る、というような幻想を持ってしまっていたのですが、実は水を飲める、使えるということは当たり前ではないのだと反省させられました。今までもお風呂の残り湯は洗濯に使っていましたが、この話を聞いてからは、洗濯でも使いきれなかった残り湯はトイレを流す時に使ったりするなど、水を無駄にしないように気をつけるようになりました。一方で、日本人が毎日お風呂に入っていることに対して「申し訳ないと感じることはない、文化が違うだけなのだ」とも言ってくれました。住んでいる環境が違くとそれにともなって生活習慣も違ってきます。それは良いか悪いかということという判断ができるようなことでもなく、適応したというべきなのかもしれません。だからといってそれが当然と考えるのではなく、外からの視点が入ることで見つめなおすことができるのがサーバスの大きな意義だと感じています。

最後に、サーバスの醍醐味をもう一つ。RさんとCさんが帰る時にSNSの連絡先を交換し写真などを送り合っていました。数日後、あるイベントで出会った女性ともSNSでやり取りを始めると、その人がRさんたちと共通の友人であることが分かりました。もしかして話を聞いてみると、なんとこの女性こそが、二人が私の家に泊まる前に一緒にいたという福島の友人だったというのです。外国の友人に地元のつながりをプレゼントしてもらった瞬間です。世界は広いけれど、身近に感じることができる。こんなことを思わせてくれたお二人でした。

5 編集後記

支部ニュース編集担当 C.N

今回は年末の締めくくりに相応しくたくさんの方の受け入れ報告をいただきました。東北のいろいろな場所でこんなにワクワクする国際交流が繰り広げられていると考えると、それだけで楽しくなってきましたね。

今年は支部ニュースを三回出せたことをとてもうれしく思っています。2019年も支部ニュースを通してできるだけたくさん皆さんと交流できる場を作っていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

最後にいつものハラール料理イベントの宣伝です。私が友人と仙台で実施している **Tigmi** のハラール料理イベントがこの 12 月で 12 回目を迎えました。毎月実施していると、常連さんができたり、一人で来てくれたり、友達を連れてきてくれたりいろいろな出会いがありました。ムスリムの方たちにとっては毎月の楽しみであり、日本人やその他の外国人にとっては知らなかった文化に触れることのできる場所になっているようです。そのような人のために来年からも活動を頑張ります！いつも仙台で活動しているのですが、最近は福島市や郡山市からも参加してくれる方がいてとても嬉しく思っています。福島の方は大変国際交流に熱心なので、近々福島市でも実施しようと計画中です。みなさんもしご都合がつかましたらいらしてくださいね。

もし **Facebook** をご利用されている場合は「**Tigmi**」と検索してみてください。情報を更新しています。もしくは C までご連絡ください。

BIG HALAL PARTY! vol13

場所：宮城県仙台市若林区東七番丁 1 - 1 5 **HOSTEL KIKO**

時間：13:45 受付、14 時料理開始、17 時食事開始、18 時解散

参加費：1500 円

持ち物：自分の飲み物、エプロン、カップ、取り皿、スプーンや箸など

2019 年 1 月の料理はインドネシア料理、ロシア料理、スリランカ料理です。これまでの皆さんのムスリムについての疑問にも答えていきます。

以下は、2018 年 10 月に作ったインドネシア料理、トルコ料理の写真です。



それではみなさん、よいお年をお迎えください！！